



従業員の自発的活動から 始まった献血活動を継続

茨城県 株式会社アンダーツリー東京 「第22回、第23回 愛の献血活動に ついて」事業



株式会社アンダーツリー東京
代表者
木下春雄さん



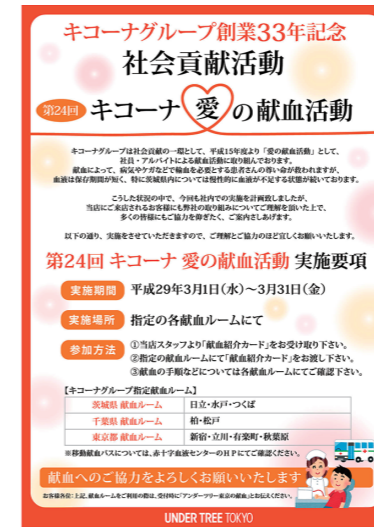
茨城県赤十字献血センターから受領した感謝状

ホール従業員によって草の根的に 始まった献血活動を全社的に行う

全国に121ホール(2017年3月末日現在)のパチンコ・スロット店を展開しているアンダーツリーグループの一翼を担って、茨城県を中心に東京都、千葉県に「キコーナ」「金馬車」のネーミングで19ホールを展開しているアンダーツリー東京。グループ全体として「地域から愛される店づくりを行う事」をミッションに掲げ、地域に根ざした様々な活動に取り組んでいる。

その活動のひとつとして、アンダーツリー東京では、2002年から日本赤十字社が展開する「愛の献血活動」に賛同し、会社を挙げて献血活動に取り組んでいる。「今は全社的な活動になっていますが、元々は2002年の4、5年前から、ホールの従業員がお客様を誘って草の根的に始めたものです」と、執行役員管理副本部長の塩野孝道さんは話す。

遊技業界では都府県方面組合、支部組合、あるいは組合員ホールで献血活動に取り組んでいるところは少なくないが、ホール従業員が自主的に始めたというのは、あまり聞かない。しかも、お客様と一緒に活動を始めたところに、地域の方々に愛され、信頼されているホールであることがうかがえる。それだからこそ、今なお活動が継続しているのだろう。「毎年、その時期になると社内的に実施要領の告知を流しますが、特に言わなくても従業員のみなさんは



献血活動への協力を呼びかけるポスター



献血会場の受付



献血にはホール従業員や遊技客が参加

当たり前のように参加してくれます」と、社内で社会貢献を担当する総務人事部の沼尻敏副部長は話す。

献血や募菓子、地域清掃など 企業風土として根づいた社会貢献

2002年に始まったときは年1回の献血だったが、2007年からは茨城県赤十字血液センターの要請もあり、春と年末の2回実施している。昨年春に行われた第22回には140名、年末の第23回には107名が参加し、累計で7,005名が参加したことになるといふ(今年3月にも実施され、122名が採血した)。ただし、これは実際に献血した人の数で、当日、献血に訪れたが体調不良などの理由で不採血となった人もいるため、参加の意思を示して献血ルームや移動献血バスに足を運んだ人は、おそらく1万人を超えるのではないかと。もちろん、このなかには従業員だけでなく、この活動を理解して参加してくれた一般の遊技客も含まれる。

実際の献血は、業務外の時間や業務に支障のない合間に、ホールが立地する場所の最寄りの日本赤十字社が運営する献血ルームや移動献血バスに向いて行すが、この際、会社名を告げると、アンダーツリー東京の献血者としてカウントされる仕組みになっている。献血活動中にはホールのお客様にもポスターを掲示するなどして協力を呼びかけるほか、取引先にもアナウンスして同じように協力を依頼しているという。

献血活動のほかにも、アンダーツリー東京ではお客様から端玉交換時のお菓子を善意で提供いただき、それをまとめて児童福祉施設などに贈る「募菓子」や、ホール周辺の地域清掃活動、地域の行事やイベントへの参加などに取り組んでいるが、それらはすべて従業員からの自主提案によって始められたものだという。地域のために何かをしたいという従業員の積極性は、もはや企業風土として根づいていると言えるだろう。「地元で愛されてこそ、私たちの経営は成り立つ。地域に生きる良き企業市民として、地域に根ざした活動を続ける従業員たちを今後もサポートしていきたい」と、塩野さんは語った。